豊かな人間性をもち、自己の生き方を考えることができる生徒の育成

～道徳科授業の工夫と地域素材を生かした体験活動の実践を通して～

日南市立南郷中学校　教諭　齋藤　秀一

Ⅰ　主題設定の理由

学習指導要領の前回改訂（平成 20 年）では、知識基盤社会において『知:確かな学力』『徳:豊かな心』『体:健やかな体』を重視した「生きる力」を育むことがますます重要になってくると示された。「知・徳・体」のバランスのとれた育成や基礎的な知識及び技能を習得、これらを活用して課題を解決するための思考力、判断力、表現力、その他の能力の育成、主体的に学習に取り組む態度を養うことが重視されてきた。

令和３年度から全面実施となった今回の改訂においては、複雑で予測困難な時代の中でも、生徒一人一人が、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となることができるよう、教育を通してそのために必要な力を育んでいくことが重視されている。こうしたことは、これまで学校教育が目指してきた「生きる力」そのものであり、加速度的に変化する社会にあって「生きる力」の意義を改めて捉え直し、しっかりと発揮できるようにしていくことが求められている。また、改訂の方向性として、資質・能力の三つの柱の一つに『学びに向かう力・人間性等の涵養:どのように社会とかかわり、よりよい人生を送るか』を掲げている。

これらのことから、「徳」を基盤とした教育の充実により豊かな人間性を育み、自己の人生について主体的に考える力をつけることができ、生きる力の育成につながると考える。

また、「特別の教科　道徳」（以下道徳科）の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、自己の人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」と示されていることから、道徳科の指導を充実させることは「生きる力」の育成につながるといえる。さらに、文部科学省「体験活動事例集－体験のススメ－[平成 17、18 年度　豊かな体験活動推進事業より]」（2008）の「体験活動の教育的意義」において「体験活動は、豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力などの生きる力の基盤、子どもの成長の糧としての役割が期待されている」とあり、「生きる力」を育むための豊かな人間性は、体験活動を充実させることによって、より高めることができると考えられる。

現在、私は本校の教務主任として第１学年（７０名：２クラス）に所属し、副担任を務めている。第１学年の生徒は、しっかりと話を聞く態度が身に付いており、真面目な態度で授業に取り組むことができる生徒が多い。また、話合い活動にも意欲的に取り組み、課題の解決を図ろうとすることができる。しかし、学力には個人差があり、自分の意見に自信がなく積極的に発表し表現することには、苦手意識をもっている生徒が少なくない。また、他人のことを思いやり、周りのことを考えた言動ができる生徒も多いが、自分本位の考えで、所属している学級や部活動内での人間関係のトラブルに悩んでいる生徒もいる。ネットや SNS などへの興味・関心は高いが、将来の夢や進路の希望について明確な考えをもっている生徒は少ない。

そこで、副担任として定期的に道徳科の授業を行い、自己の生き方を考えさせることを通して、「豊かな人間性」を育成していきたいと考えた。さらに、自己の生き方

を考えることにより、将来の夢や進路への希望をもち、今の生活の在り方や学習への取り組み方について主体的に考える力を育みたいと考えた。また、地域素材を生かした体験的な学習活動の活用を図り、郷土の良さや郷土に生きる人たちの生き方に触れる機会を設定することで、自己の生き方を考える場面を増やし、生徒の「豊かな人間性」を高めることを目指そうと考え本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

豊かな人間性をもち、自己の生き方を考える生徒を育成するために、道徳科の授業改善と、地域素材を生かした体験的な学習活動の活用について研究することを通して、その有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

1　道徳科の授業において、多様な生き方や価値観に触れる教材の活用と指導方法の工夫を行えば、生徒自身の自己の生き方を考える力が高まり、生きる力の育成を図ることができるであろう。

2　地域素材を生かした体験活動を実践し、郷土の良さや郷土に生きる人たちの生き方に触れる機会を設けていけば、自己の生き方を考えられる豊かな人間性の醸成を図ることができるであろう。

Ⅳ　研究の基本的な考え方

1　「自己の生き方を考える生徒」の定義

人の生き方を知る学習（道徳科の授業・体験的な学習活動）を通して、他人と関わり合いながら、自己の生き方をより良くしていこうと主体的に考える生徒。

Ⅴ　研究内容

1　道徳科の教材開発と活用　　2　道徳科の授業実践

3　地域素材を生かした体験的な学習活動の活用　　4　体験的な学習活動の実践

Ⅵ　研究の実際

1　道徳科の教材開発と活用

(1)　道徳科の教材開発の意義

道徳科では検定教科書が導入され、学級担任を中心に教科書に基づいて道徳科の実践を行っている。教科書は、すべての内容項目（中学校は２２項目）が網羅されており、教科書に基づいて授業を実施すれば年間３５回の道徳の授業ができるように構成されている。

しかし、中学校学習指導要領では、「生徒の発達の段階や特性、地域の実情等を考慮し、多様な教材の活用に努めること」と明記されている。また、解説には、「道徳科においても、主たる教材として教科用図書を使用しなければならないことは言うまでもないが、道徳教育の特性に鑑みれば、各地域に根ざした郷土資料など、多様な教材を併せて活用することが重要である」と示されている。つまり、教科書を基本としながら、生徒や地域の実態に即した多様な教材を活用することは、自己の生き方を多面的・多角的に捉えて考えさせる上で有用性が高いといえる。

さらに、道徳科の授業を実施するにあたっては指導要領に示されている２２の内容項目を全て取り上げることになっている。しかし、年間３５時間の年間指導計画を見ると、教科書の教材を複数使用して構成している項目がいくつかある。この複数で構成されている項目の授業に対して、他の教材の使用が可能になるものと考えられる。また、道徳科の目標の中に「道徳的諸価値について

の理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」と示されていることから、多様な教材の開発や活用は、生徒が問題意識をもって考えたり、感動を覚えたりするような活動を充実させる上で、大変意義深いといえる。

(2)　道徳科の教材開発の視点

自己の生き方を考えさせるためには、他人の生き方から多様な見方、考え方を学ばせることが大切である。他人の生き方を知ることで、自分の生き方に活かせる部分を見出すことが可能になるであろうと考えられる。そこで、誰もが知っている偉人の生き方や、逆に、名も無き同じ日本人としての生き方に焦点をあて、生き方の共通点や大切な視点を考えさせ自らを振り返りながら、今の自分の生き方に目を向けさせるものにする。また、自己評価を行い、その時間に学んだことの振り返りと、考えることができたことのまとめを文章化する活動を行わせる。

２　道徳科の授業実践

(1)　多様な教材を活用した授業計画

ア　カーネル・サンダースの人生から学ぶ	６月１５日	１年１組
	６月２９日	１年２組
イ　パラオの国旗から日本人について考える	７月　６日	１年２組
	７月２０日	１年１組
ウ　小村寿太郎の人生から学ぶ	１０月１２日	１年１組
	１０月２６日	１年２組
エ　古代日本人から受け継がれてきたものから日本人について考える	１１月１１日	１年２組
	１１月１６日	１年１組
オ　優しさとは何かを考える	１１月３０日	１年１組
	１２月　７日	１年２組

(2)　授業の実際

教材として取り上げる人物の生き方から、授業のテーマを「夢を叶えるために一番必要なことは何か」と設定し、次の３つのポイントを押さえながら、夢を叶えるためには、情熱をもって生きることが大切であるとの考えを導き出した。

○　一生懸命働く
　（どんな状況でも、何事にも一生懸命に取り組むことができる）

○　ピンチこそ次への進化のチャンス
　（ピンチは必ず訪れるがそれをチャンスに変えることができる）

○　誰かのために生きる、その動機は愛
　（誰かのために、と思い願う気持ちがピンチをチャンスに変える）

ア　「カーネル・サンダースの人生から学ぶ」

本教材は、ケンタッキーフライド・チキンの創業者として有名なカーネル・サンダースを取り扱ったものであり、３つのポイントを見出し、夢を叶えるために必要なことを考えることをねらいとして設定した。

サンダースが、６５歳から起業して成功を収めた苦労人であることを知っている生徒は少ない。幼い頃から、自分の弟妹や女手一つで自分たちを育ててくれている母親のために、職を転々としながらも一生懸命に働き、数々のピンチが訪れてもそれを乗り越え、世界に知られる大企業を作り上げることになった人物である。何事にも一生懸命取り組み、誰かのためにという思いでピンチを見事にチャンスに変えて成功した人生のポイントを考えさせた。

イ　「パラオの国旗から日本人について考える」

本教材は、日本と瓜二つの国旗をもつ太平洋に浮かぶ島国パラオ共和国を取り扱ったものであり、パラオ共和国が日本と瓜二つの国旗をもつに至った経緯を知り、日本人としての誇りをもった生き方を考えることをねらいとして設定した。

パラオの国旗が、なぜ日本の国旗と瓜二つであるのか、その歴史とパラオの人人と戦時中の日本兵たちとの交流を知る生徒はいない。終戦記念日に近い夏休み前に取り扱いたい内容である。戦争という極限の状態にあっても心と心の交流によって、その後何十年たっても消えることのない絆があることから、日本人としての誇りをもった生き方を考えるとともに今を生きることの大切さを考えさせた。

【写真１　授業の様子】

ウ　「小村寿太郎の人生から学ぶ」

本教材は、外交官として歴史に名を残す郷土の偉人、小村寿太郎を取り扱ったものであり、サンダースの授業で学んだ３つのポイントを確認し、夢を叶えるために必要なことを考えることをねらいとして設定した。

小村寿太郎は、日南市民にとって最も有名な郷土の偉人であり、命日である１１月２６日を「振徳教育の日」と定めている。「振徳教育の日」には、市内の全ての小・中学校で小村寿太郎公に関する学習を実施しているが、その詳しい人生や歴史的偉業を理解している生徒は少ないことから、生い立ちからの生涯を詳しく取り扱い、夢を叶えるための３つのポイントを確認し、これまでの自分を振り返させながら生き方について考えさせた。

エ　「古代日本人から受け継がれてきたものから日本人について考える」

本教材は、日本人が培ってきた人生観や価値観を取り扱ったものであり、古代人から受け継がれてきた考え方に触れ、日本人としての誇りをもった生き方を考えることをねらいとして設定した。

古代日本人は、あらゆるものに対して、神聖さをもって扱っていた。禍でさえも神聖なものとしてとらえてきたため、縄文時代は一万年以上も争いを起さなかった。これは、他の国や地域では考えられないことであり、日本人の精神として損得ではなく、その行為が美しいか美しくないかで判断する感性があったことが分かる。そこで、自分の今の生活を振り返ったり、これからの生き方を考えたりする際、正しいか正しくないかではなく、美しいか美しくないかの視点で考えることの大切さを考えさせた。

ウ　「優しさとは何かを考える」

本教材は、「未来のための探究的道徳　問いにこだわり知を深める授業づくり」（荒木　寿友　2019）から、「優しさとは何か」というテーマで道徳的知の探究的な学習を取り扱ったものであり、議論する場を設けることによって、他者に対する寛容な心を考えることをねらいとして設定した。

普段無意識の中で判断している「優しさ」の基準を、自らの経験と照らし合わせ「優しくされる側」の視点から思考し、自分と他者との優しさの基準の違いを議論させた。また、タブレットを用い、少人数による議論の場や、学級全体での発表の場で活用を

図った。そして、「優しさ」の定義を改めて構築していく過程で、他者に対し寛容な心で接することの大切さや、友人との関係性を改めて考え直し、これからの生活に活かすべきことを考えさせた。

(3)　生徒の自己評価と分析

ア　自己評価シート

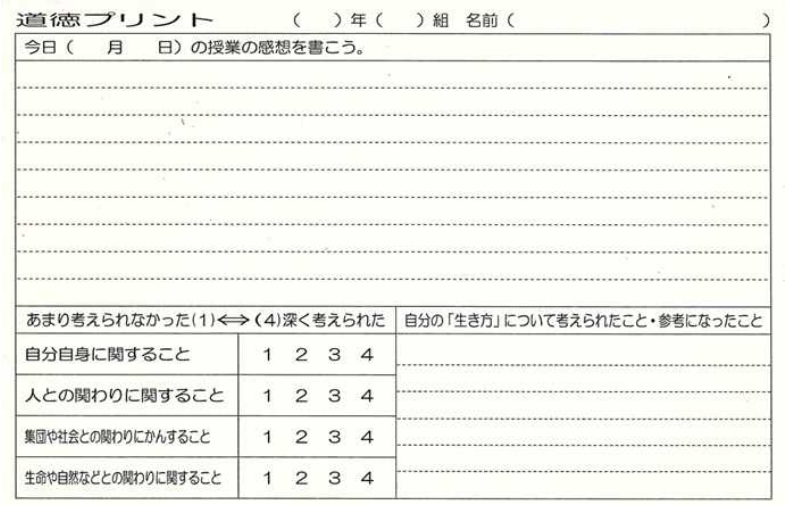
学習指導要領に示されている内容項目の４つの視点は、次のとおりである。

A　主として自分自身に関すること
B　主として人との関わりに関すること
C　主として集団や社会との関わりに関すること
D　主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

この４つの視点は互いに深い関連があり、一つの教材に内在する道徳的価値は必ずしも一つとは限らない。

そこで、ワークシートを作成し、毎時間の終末に記述式で感想を書かせるとともに、４つの視点で授業を振り返らせ自己評価をさせることにした。【資料１】

自己評価は４段階とし、複数の視点で自分の生き方についての考えを深められるように、記述する欄も設けた。



道徳プリント　（　）年（　）組　名前（　　）

今日（　月　日）の授業の感想を書こう。

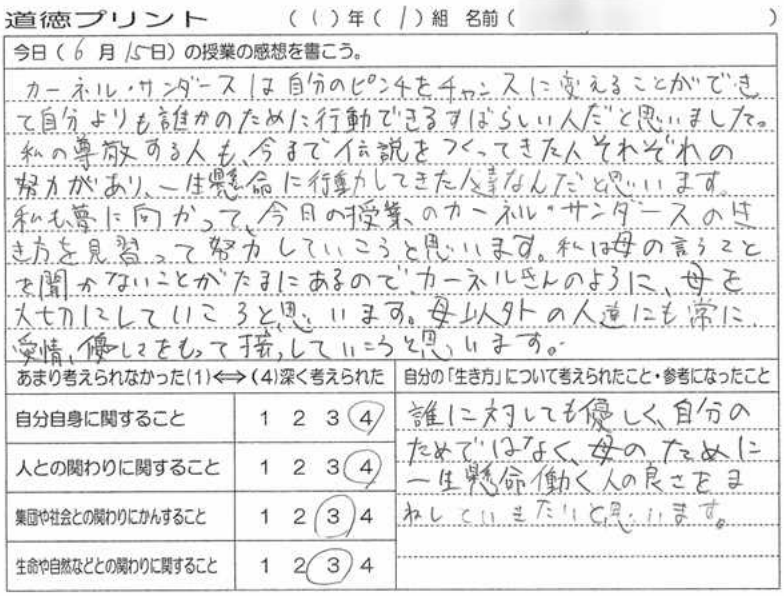
あまり考えられなかった(1)⟺(4)深く考えられた		自分の「生き方」について考えられたこと・参考になったこと
自分自身に関すること	1 2 3 4	
人との関わりに関すること	1 2 3 4	
集団や社会との関わりにかんすること	1 2 3 4	
生命や自然などとの関わりに関すること	1 2 3 4	

【資料１　自己評価シート】

イ　実際の評価シート

【資料２】

これは、「カーネル・サンダースの人生から学ぶ」の自己評価シートである。３つのポイントを理解し、自分の今の生活を振り返って考えている。特に自分の生き方を考えることを重視した結果、Ａの視点の自己評価が高くなっている。また、Ｂの視点の自己評価も高く、人生は他人との関わりによって成り立つことの大切さを考えたようである。



道徳プリント　（ ）年（ 1 ）組　名前（　　）

今日（6 月 15 日）の授業の感想を書こう。

カーネル・サンダースは自分のピンチをチャンスに変えることができて自分よりも誰かのために行動できるすばらしい人だと思いました。私の尊敬する人も、今まで伝説をつくってきた人それぞれの努力があり、一生懸命に行動してきた人達なんだと思います。私も夢に向かって、今日の授業のカーネル・サンダースの生き方を見習って努力していこうと思います。私は母の言うことを聞かないことがたまにあるのでカーネルさんのように、母を大切にしていこうと思います。母以外の人達にも常に愛情、優しさをもって接していこうと思います。

あまり考えられなかった(1)⟺(4)深く考えられた		自分の「生き方」について考えられたこと・参考になったこと
自分自身に関すること	1 2 3 (4)	誰に対しても優しく、自分のためではなく、母のために一生懸命働く人の良さをまねしていきたいと思います。
人との関わりに関すること	1 2 3 (4)	
集団や社会との関わりにかんすること	1 2 (3) 4	
生命や自然などとの関わりに関すること	1 2 (3) 4	

【資料２　生徒の自己評価シート①】

【資料３】

これは、「パラオの国旗から日本人について考える」の自己評価シートである。戦時中の出来事から、命の大切さを学び、これからの人生において、命との向き合い方、命をどうとらえて生きていこうと考えたのかを

知ることができる。命は大切なものであるが、なぜ、それが大切であるのか、つながれてきたものであるからという視点をもって考えることができている。

【資料４】

これは、「優しさとは何かを考える」の自己評価シートである。表面上の優しさだけでなく、その裏にある本当の優しさは何かという視点で考えることができている。人と意見を交流し、考え方の違いから、人を理解することの大切さも考えることができている。学んだことをこれからの生き方に活かしていこうという意思を伺うことができる。

⇒(4)深く考えられた	自分の「生き方」について考えられたこと・参考になったこと
1 2 3 (4)	人に優しくして、命を自分のために勝手にあつかうのではなく、命をつないできた人達の思いをうけつぐために大切にしようと思いました
1 2 3 (4)	
1 2 3 (4)	
1 2 3 (4)	

【資料３　生徒の自己評価シート②】

⇒(4)深く考えられた	自分の「生き方」について考えられたこと・参考になったこと
1 2 3 (4)	僕は、今まで優しくすることと怒ることは真逆のことだと思っていましたが、実は同じだったことを知り、怒られても腹を立てるなどせず、素直に聞き入れようと思いました。また、優しさとは、人によって感じかが違うと思うので、相手のことをきちんと考えた上で行動したいと思いました。
1 2 3 (4)	
1 2 3 (4)	
1 2 3 (4)	

【資料４　生徒の自己評価シート③】

ウ　自己評価の集計結果

自己評価の集計結果は、次のとおりである。

教材名	学級	視点 A	視点 B	視点 C	視点 D	平均
カーネル・サンダースの人生から学ぶ	１組	３．４６	３．４６	３．０６	２．５４	３．２９
	２組	３．４９	３．５４	３．４３	３．３７	
	平均	３．４７	３．５０	３．２４	２．９６	
パラオの国旗から日本人について考える	１組	３．３９	３．４５	３．５２	３．７３	３．５０
	２組	３．４７	３．５６	３．４４	３．４４	
	平均	３．４３	３．５１	３．４８	３．５８	
小村寿太郎の人生から学ぶ	１組	３．４４	３．５９	３．２８	２．４４	３．３２
	２組	３．３８	３．５３	３．５３	３．３４	
	平均	３．４１	３．５６	３．４１	２．８９	
古代日本人から受け継がれてきたものから日本人について考える	１組	３．６９	３．５０	３．５０	２．８４	３．３５
	２組	３．３２	３．４１	３．２１	３．２９	
	平均	３．５１	３．４６	３．３５	３．０７	
優しさとは何かを考える	１組	３．６７	３．７６	３．３０	２．２４	３．３８
	２組	３．６９	３．８１	３．４４	３．１６	
	平均	３．６８	３．７９	３．３７	２．７０	

【表１　自己評価結果】

評価結果から、どの教材も視点Ａ「自分自身に関すること」と、視点Ｂ「人との関わりに関すること」については、深く考えることができたようであるが、道徳的価値を感じる視点は人それぞれであり、平均値に学級による違いが見られる。次に、視点Ｃ「集団や社会との関わりに関すること」と視点Ｄ「生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」は、視点Ａ・Ｂと比較すると若干評価が低かったことから、多面的・多角的な視点で物事を考えることについては課題が残った。また、カーネル・サンダースや小村寿太郎といった歴史的偉人の生き方から学ぶ教材とそれ以外を比較すると、偉人から学ぶべきこともあるが、歴史に名を残さずとも同じように人生を生きてきた日本人としての生き方から考え、学ぶことが多いと感じた生徒が少なからずいたのではないかと考えられる。

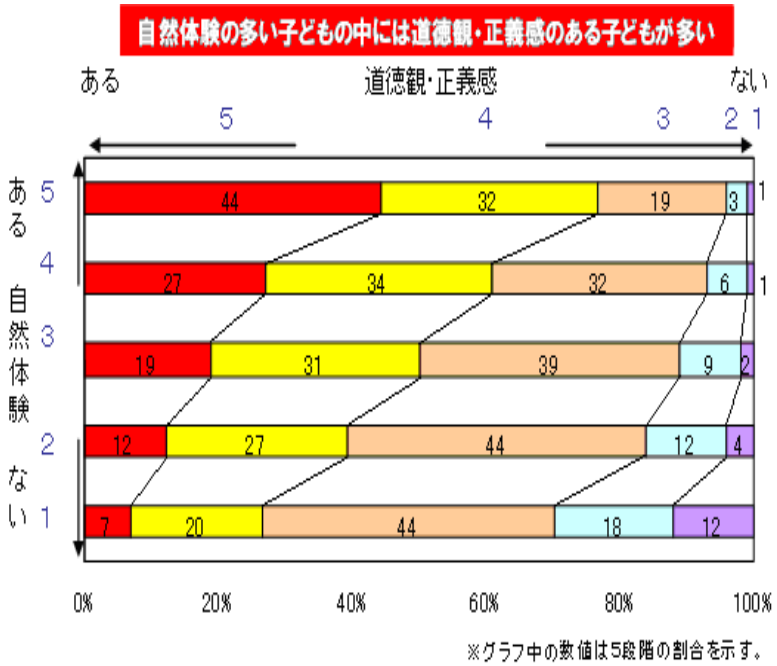
3　地域素材を生かした体験的な学習活動の活用

(1)　体験的な学習活動の意義

文部科学省「体験活動事例集－体験のススメ－[平成 17、18 年度　豊かな体験活動推進事業より]」(2008) には、体験活動とは、「文字どおり、自分の身体を通して実地に経験する活動のことであり、子どもたちがいわば身体全体で対象に働きかけ、かかわっていく活動のことである」とある。また、「直接体験」、「間接体験」、「疑似体験」の３つの体験活動があるが、今後の教育において重視されなければならないのは、ヒト・モノや実社会に実際に触れ、かかわり合う「直接体験」であると示されている。

また、体験活動は、思考や実践の出発点あるいは基盤として、あるいは、思考や知識を働かせ、実践してよりよい生活を創り出していくために必要であると考えられている。

さらに、【資料５】から分かるように、自然体験が豊富な子どもの中には、道徳観・正義感に富む子どもが多いなど、自然体験が子どもに一定程度の良い効果をもたらすことが各種調査等から明らかになりつつあり、体験活動を学習活動の中に計画的に設定し、活用していくことには、大きな意義があると考えられる。



H17 独立行政法人国立青少年教育振興機構「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」より

【資料５　体験活動に関する調査資料】

(2)　港の町南郷の特色を生かした体験活動設定のねらい

本校は、２００９年に日南市と合併した旧南郷町の中心部に位置している。旧南郷町は、古くから漁業で栄えた港町で、漁業関連の仕事に就く保護者も多い。しかし、海や漁業に関わる知識や体験が乏しい生徒が少なくない。

本校では、南郷ならではの特色ある教育活動として、学校の行事と総合的な学習の時間を使い、校区内にある栄松ビーチでシーカヤック体験を全学年で実施している。校区内の身近な場所で実施できる体験であるが、中学校入学までに経験したことのある生徒はほとんどいない。つまり、自分たちの暮らす地域の良さを知る、貴重な体験の場となっている。

そこで、この貴重な体験活動を柱として、さらに地域の人材や素材を生かした体験的な活動を設定し、郷土の良さや郷土に生きる人たちの生き方に触れさせ、自己の生き方を多面的に考える豊かな人間性の醸成を図ることとした。

4　体験的な学習活動の実践

地域素材を生かした体験活動として、１学年の生徒を対象に、本校所属の地域コーディネーターと連携しながら、地域の主幹産業である漁業について理解を深める活動を計画した。「港の町南郷を知る活動」として、総合的な学習の時間を中心に実施した。

(1)　シーカヤック体験活動

シーカヤック体験は、学校の行事として７月上旬に学年・学級別に実施している。初めて体験する１年生は、シーカヤックの魅力についての講話学習と、操縦に関する講習会を事前に行った。体験活動は各学級３時間扱いとし、栄松ビーチでインストラクターの指導を受けながら実施した。１年生から２年生、３年生と学年が上がるほど、活動するエリアを拡大し、海抜０メートルからの豊かで美しい南郷の海の景色を満喫した。

この貴重な体験を通して、生徒たちは、自分たちの住む南郷町の豊かな自然を改めて知るとともに、南郷の自然を生かした職業に携わる人や、体験学習当日にボランティアとして参加してくださった講師の方々の生き方について知ることができた。地域に根差した人たちの生き方について考えるとともに、地域に対する思いを感じとることができたようである。

○　シーカヤック体験学習

・シーカヤックはしたことがないので全く分からないので、先生の話をきちんと聞いて、上手くなりたいです。
・シーカヤックをしながら、南郷の海とふれ合ったりして、もっと南郷の海について知りたいです。
・船をこいだりするのは苦手なので、シーカヤックができるか分からないけど、一生けん命がんばりたいです。

【資料６　シーカヤック事前学習（生徒）】

【写真２　シーカヤック体験の様子】

(2)　ブランド魚「美々鯵」に関する学習

南郷目井津漁港で水揚げされた、５つのブランド基準をクリアした特別な鯵を目井津のブランド魚「美々鯵」として売り出している。

この「美々鯵」ブランド化の取組と地引網漁について、講師を招いて講話学習を行い、実際に「美々鯵」を三枚におろす体験学習を行った。地元の水産業者の方に実演をしていただき、生徒一人一人が「美々鯵」を三枚におろす実習を行った。おろした「美々鯵」は酢飯にのせ、お寿司として食した。

【資料７】の生徒の感想から分かるように、魚をさばく体験は貴重ななる体験となり、自分たちの暮らす郷土の環境や良さを改めて知る機会になったようであった。また、命を頂くことの大切さに気付いたり、友達と協力しながら、自分の手でつくった食事の美味しさと達成感を感じたりするなど、様々な発見や感動があった体験活動となった。

【写真３　魚さばき体験の様子】

☆魚さばき体験の感想

・骨を切るときに、結構固くて、思うとおりに切れなくて、むずかしかったけど、切れたときは、達成感がありました。
・今まで、魚をさばくときは、内臓はとるのが、こわかったから、大人の人にしてもらってたけど、今日、自分で出来たので、うれしかったです。
・これからは、1人で全部、してみたいです。

【資料７　魚さばき体験の感想（生徒）】

(3)　「かつお一本釣り漁業」に関する活動

シーカヤック体験と同日に、２０２１年に日本農業遺産に認定された「かつお一本釣り漁業」に関する体験活動を設定した。日本農業遺産である「かつお一本釣り漁業」と漁業協同組合の仕事について、講師を招いて講話学習を行った後、漁師飯である「かつお飯」をつくる体験活動を地域ボランティアの協力を得ながら実施した。「かつお飯」づくりでは、かつお船の元船長である公民館長に実演していただきながら、さばき方と魚の部位の名称について教えていただいた後、生徒一人一人がかつおをさばく体験活動を行った。生徒がさばいたかつおを使って、「漬け丼」と「つみれ汁」、「竜田揚げ」をつくり、昼食として味わった。

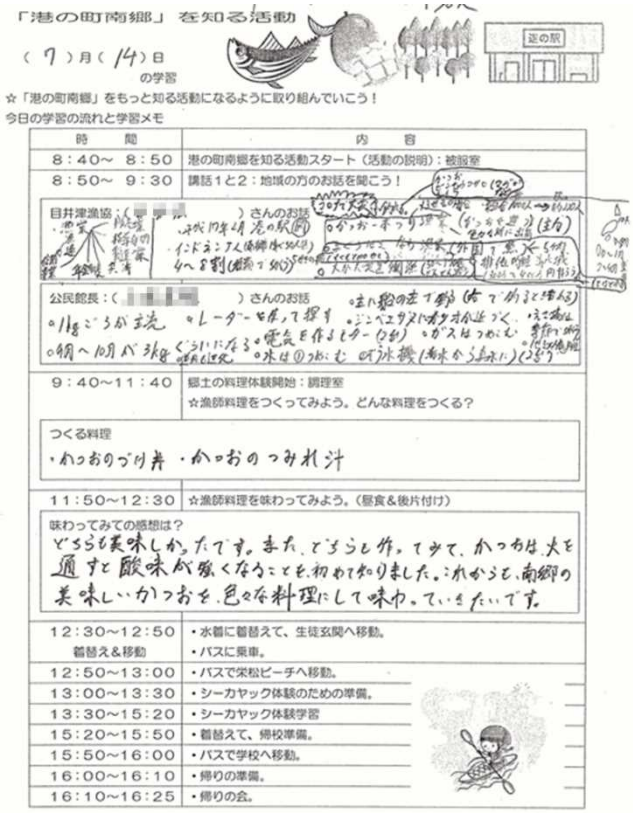
【資料８】のワークシートを利用し、体験活動の記録を書き込んでいった。

このワークシートを見ると、多くの生徒が講師の話を聞いて、分かったことや初めて知ったことなどをしっかりと記録していった。やはり、港町に暮らす生徒ではあるが、魚や漁業に関する知識は決して多くなく、学習する機会がなければ、知識も関心も広がっていかないことが分かる。この講師の話や料理をつくる体験活動を通して、郷土の漁業に関する理解が深まったようである。特に日本農業遺産に認定された「かつお一本釣り漁業」の誇るべき特長と、日本の漁業、南郷の漁業が置かれている漁業の現状から、大切に守っていくべき郷土の遺産であることを実感したようである。

ブランド魚「美々鯵」の取組も「かつお一本釣り漁業」の農業遺産認定への取組も、郷土に暮らす方々の大切な思いが形になったものであることに気付いたようである。また、これからの日々の生活の中で郷土や漁業を感じる目線が育ったようである。

「美々鯵」の体験活動と合わせて、１１月の文化発表会で、活動のまとめを発表し、改めて活動の意義や学んだことを振り返り、再確認することができた。

【写真４　かつお飯づくりの様子】



「港の町南郷」を知る活動

（ 7 ）月（ 14 ）日 の学習

☆「港の町南郷」をもっと知る活動になるように取り組んでいこう！

今日の学習の流れと学習メモ

時間	内容
8：40～ 8：50	港の町南郷を知る活動スタート（活動の説明）：被服室
8：50～ 9：30	講話1と2：地域の方のお話を聞こう！
9：40～11：40	郷土の料理体験開始：調理室 ☆漁師料理をつくってみよう。どんな料理をつくる？
11：50～12：30	☆漁師料理を味わってみよう。（昼食&後片付け）
12：30～12：50	・水着に着替えて、生徒玄関へ移動。
着替え&移動	・バスに乗車。
12：50～13：00	・バスで栄松ビーチへ移動。
13：00～13：30	・シーカヤック体験のための準備。
13：30～15：20	・シーカヤック体験学習
15：20～15：50	・着替えて、帰校準備。
15：50～16：00	・バスで学校へ移動。
16：00～16：10	・帰りの準備。
16：10～16：25	・帰りの会。

【資料８　体験活動ワークシート（生徒）】

【写真５　文化発表会での発表の様子】

Ⅶ　研究の成果と課題

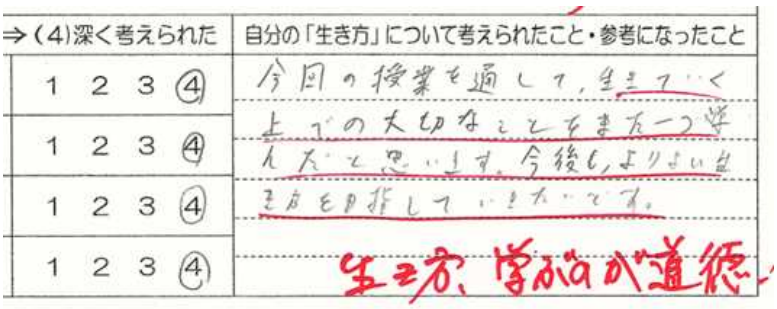
1　研究の成果

○　道徳科の授業は、教科書を基に、学級担任が中心となって進めているが、一人が定期的に二つの学級で授業をすることにより、生徒たちの変容や違いをより的確に把握することができた。効果的な教材の提案をすることが可能ではないかと考えられる。

○　ねらいをもった独自の教材開発を行ったことにより、生徒の中に、「これからはこんな風に生きていきたい」とか、「こんな生き方をすべきだ」という思いが生まれたのではないかと考えられる。資質・能力の一つである「学びに向かう力・人間性等の涵養：どのように社会とかかわり、よりよい人生を送るか」の育成に寄与することができた。

○　地域素材を生かした体験活動により、郷土の良さや郷土に暮らす人々の思いを体感し、郷土に対する感謝の気持ちを醸成することができた。

○　人の生き方を知る学習（道徳科の授業・体験的な学習活動）を通して、他人と関わり合いながら、自己の生き方をより良くしていこうと主体的に考えることができる生徒の育成につながった。



⇒(4)深く考えられた	自分の「生き方」について考えられたこと・参考になったこと
1　2　3　④	今回の授業を通して、生きていく
1　2　3　④	上での大切なことを三つ学
1　2　3　④	んだと思います。今後も、よりよい生
1　2　3　④	き方を探していきたいです。
1　2　3　④	生き方、学びが道徳

【資料９　生徒の自己評価シート④】

2　今後の課題

●　生徒の道徳的価値観や実践力を、具体的・客観的にはかる方法はないので、今後の学校生活全般を通して生徒の変容を観察していくために、職員の共通理解を図っておく必要がある。

●　道徳科で学んだ物事の見方・考え方を、どのように生かすか、どのように道徳的実践力につなげていくのか、具体的な取組と関連付けながら、検討していく必要がある。

●　教科書で行う授業を基本としながらも、自己の生き方を多面的・多角的に捉えて考えさせるために、今後も、生徒の発達の段階や特性、地域の実情等を考慮し、多様な道徳科の教材の開発と活用に努めていく必要がある。

●　地域素材を生かした体験活動を充実させるためには、地域や専門機関の協力が欠くことができないので、より良い地域との連携の在り方や体制づくりが必要である。

Ⅷ　参考・引用文献

1　中学校学習指導要領（平成２９年告示）解説　特別の教科　道徳

2　文部科学省（2008)「体験活動事例集－体験のススメ－[平成 17、18 年度　豊かな体験活動推進事業より]」

3　荒木寿友（2019)「未来のための探究的道徳　問いにこだわり知を深める授業づくり」(明治図書)

4　柴原弘志・荊木聡（2018)「中学校新学習指導要領　道徳の授業づくり」(明治図書)

5　堀裕嗣（2019)「道徳授業で『深い学び』を創る」(明治図書)

6　ひすいこたろう・滝本洋平（2016)「なぜジョブズは、黒いタートルネックしか着なかったのか？～真の幸せを生きるためのマイルール２８～（A-Works)

7　ひすいこたろう(2016)「心が折れそうになるときキミに力をくれる奇跡の言葉」(SB クリエイティブ)